

あるむぜお100

府中市郷土の森博物館だより

a / museo NO. 100

2012年6月20日



市内若松町の盆飾り【2009年（平成21）8月1日撮影】

目次

- 1-2 年中行事の現在 in 府中
 - ①盆行事
- 3 展示会案内
 - 特別展 あしもとネイチャーワールド
 - 展示で楽しむ 里山どうぶつ探検
- 4 展示会案内
 - 企画展 ANZAI-SHO 行在所
- 5 最近の発掘調査
 - 中世の古道に立つ板碑の発掘
- 6-7 ノート 見た！感じた！金環日食 2012
- 8 知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物
 - ⑤浅野長政
- 9 平成 23 年度資料受入れ、利用状況報告、
新刊案内
- 10 町にまつわる雑学講座 四谷

年中行事の現在 in 府中

お正月から大晦日まで、日本にはさまざまな年中行事があります。平安時代より続くものもあれば、節分の恵方巻きのように最近になって広く行われるようになったものもあります。そのなかでもふるくから伝承されている府中市域の年中行事の現在について紹介します。

① 盆行事

家の方が亡くなって初めてお盆（初盆）を迎えたこの家では、階段状の壇をつくり莫塵を敷き、位牌や供物（果物、蕎麦、てんぷらなど）を供えています。壇には竹を立て、十三仏などの掛軸を複数垂らし、位牌の上には鬼灯を渡しています。壇の左脇には提灯、茄子と胡瓜でつくれた牛馬、蓮などの花が供えられています。

お盆とは、本来旧暦7月15日を中心として、祖先を祭祀する行事です。盂蘭盆会という仏教用語を語源としており、自分の親兄弟などを含めた祖先祭祀、祖霊信仰にルーツがある日本を代表する年中行事のひとつです。祖先の魂を家にお迎えし、歓待した後、お送りする行事として、日本全国に伝わっています。お盆には里帰りする人が多く、「お盆休み」という言葉があるように、夏休みとしての意味合いも持っています。

府中の辺りでは江戸時代まで旧暦7月15日を中心に行っていたようですが、1783年（明治6）に新暦になって以降、おもに三つのパターンに別れています。ひとつ目は新暦7月15日を中心とし、東京、神奈川県の一部で行われる、いわゆる「東京盆」。二つ目は新暦8月1日を中心とした「府中盆（一日盆）」。そして三つ目は旧暦7月15日に近い新暦8月15日を中心としたお盆で、日本で現在一般的なお盆といえばこれを指すことが多いようです。市内で特徴的な府中盆は、旧農村部を中心に行われています。調布市や小金井市など近隣にもそうした地区があります。明治以降盛んに行われていた養蚕の仕事が、新暦8月15日頃だと忙しいため、比較的落ち着いているこの時期にずらした、と伝えられており、養蚕が行われなくなった現在でもその伝統が続いているということです。

とはいえ、どの日程でも実施内容に大差はなく、全体で3～4日間行われます。初日に墓地や道端などで麦わらで迎え火を焚いた後、墓に仏様（先祖）を迎えに行き、各家でつくった盆棚にまつります。棚には青竹を立て、その上部に萱で縄を縛って注連縄のように張り、提灯に見立てた鬼灯をかけます。菰や莫座を敷き、仏画などの掛軸をかけ、その前に位牌を並べます。さらにうどんや蕎麦に麻殻（オガラ）でつくった箸をそえ、蓮の葉を皿に見立て、きざんだ茄子を盛り、饅頭、菓物などさまざまなものを供えます。かつては婦人たちがそこに集まり念仏をあげていたといいますが、現在は期間中、お坊さんにお経をあげてもらいます。特に初盆の家では盛大にします。最終日（送り）の夜には、仏様が乗る胡瓜と茄子でつ

くった牛馬とともに送り火を焚きます。

こうした盆行事は、多くの年中行事が消滅していく中、今でも市内全域で行われていますが、行いは近年変化があるようです。田畑が激減したことにより、自前で用具調達が困難になったからでしょう。迎え、送り火の燃料は麦わらに代わり購入した麻殻が主流となり、その時期が近付くと鬼灯、莫座、蓮の葉などとともにホームセンターやスーパーでも販売されています。腐敗をふせぐためか、胡瓜や茄子ではなく麻殻とイグサでつくった牛馬も売られています。近隣の迷惑を考慮してか、火を焚く光景も簡略化され、あまり見られなくなっているようです。

もちろん個人宅で行われるため、家によって伝承に差があります。簡略化されている家もちろんあります。しかし、先祖代々行ってきた行事であり、毎年行うべき主要な年中行事と認識されているからこそ、用具を購入してでも各家で行われ続けているといえるでしょう。（佐藤智敬）



1976年（昭和51）8月15日、市内宮西町で灯された麦わらによる送り火。右脇に茄子と胡瓜の馬が置かれている。

展示会案内

あしもとネイチャーワールド

展示で楽しむ

里山 とろろ探検



2012/7/21日～9/2日

会場：本館1階特別展示室

里山って聞いたことありますか？その昔、里山の低い山々は農家に利用され、新や落葉、山菜やキノコなどの収穫には事欠かない場所として、重要な農用林と位置付けられていました。やがて、1960年代の後半にこれを里山と呼ぶようになり、詩的な響きや、親しみやすい言葉として普及していきました。

時代の経過は都市化という流れを生み、これに伴って人間の生活形態も変わっていきました。里山は一気に崩壊し、遊休地化してしまったのです。農業主体の生活が減少し、農家が消えていくことで、裏山を必要とする理由も無くなったからです。

近年ではこの「里山」という言葉は、水田や畑、雑木林、小川なども含めた自然環境全体を表す意味で使われるようになりました。いわゆる里山環境とか、里山生活といった使い方です。

夏の特別展では、里山動物をテーマに取り上げます。古くは人間生活と関わり合いながら共存してきた森の動物たち。都市化が進んだ今の東京において、果たしてかつての里山動物は生息しているのでしょうか。

府中の代表的里山環境は「浅間山」です。昔の相模川が運んだ堆積物を、その後流れてきた昔の多摩川が削ってできた残丘です。クヌギ・コナラ等、武蔵野の面影を残す雑木林で覆われた立派な里山風景が展開しています。昆虫や野鳥を中心

とした豊富な里山動物が生息し、まだまだ府中の緑が踏み止まっていることを教えてくれるのです。

その一方で里山の減少は、里山動物の都市侵入を促しています。本来の居場所から移動してきたタヌキや、外国から侵入して増加傾向にあるハクビシン等、市街地においても、こんなものがあるの？と言った動物が出没しています。かつては田畑にいる農家の人間を警戒して山から出て来られなかった連中が、もはや結界が破られた状況の中、各所に活動範囲を広げているのです。

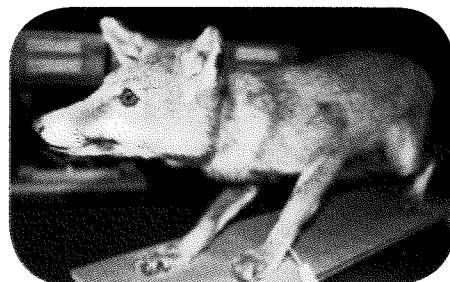
では、本来いるべき所で里山動物はもう見られないのでしょうか。府中から多摩川を挟んで多摩丘陵、さらに西へと進んだ先には高尾山、その北東には狭山丘陵、そして奥多摩の山々・・・どうやらまだまだ緑は深いようです。府中周辺では確認できない里山動物も、多摩の奥山にはしっかりと息づいています。もちろん、昔の自然そのままではありません。環境の変化で、逆に数が増えてしまい、人間生活に弊害をもたらす種類もいます。

人が干渉してこそ成立していたのが本来の里山環境です。現在はバランスを崩しながらも何とか残っている実情です。そこに生きる動物たちを再認識するとともに、彼らが抱える問題点を一緒に考えてみたいと思います。

(中村武史)



ニホンリス剥製
八王子市教育委員会蔵



ホンドキツネ剥製 八王子市教育委員会蔵

企画展

ANZAI-SHO 行在所

～田中三四郎家と明治天皇～

7月14日(土)～10月8日(祝)

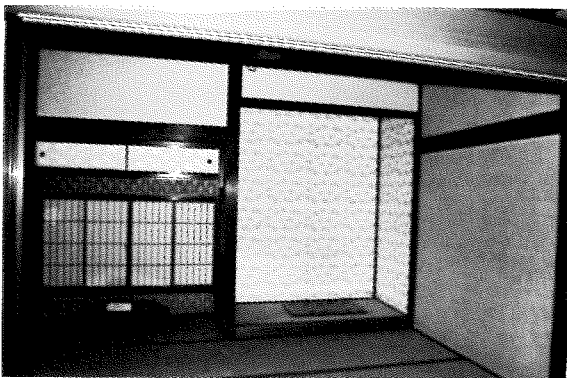
会場：本館2階企画展示室
観覧無料

郷土の森博物館の園内にある復元建築物・旧田中家住宅の門前には、「明治天皇府中行在所」と刻まれた石柱が建っています。これは、明治天皇が宿泊した旧田中家が国の文化財に指定されたことをうけて建てられたものです（戦後解除）。

行在所という言葉は、今はあまり使用されませんが、天皇の仮の御殿を意味し、巡幸や行幸の際に天皇が宿泊した場所のことをいいます。宿泊せず、休憩のみの場合は小休所といたしました。

明治天皇の巡幸・行幸は明治時代の前半に多く行われました。これは今までとは異なる能動的な天皇の姿を民衆に示すことを目的としたものでした。人々は、馬車に乗った天皇の行列を見て、新しい時代の到来を実感したのです。

府中における明治天皇の休憩・宿泊は、6度に及びます。1880年（明治13）の山梨・三重・京都巡幸における休憩をはじめとし、1881年の兎狩り天覧時の休憩と宿泊、および鮎漁天覧時の宿泊、1882年・1884年の兎狩り天覧時の宿泊です。



旧田中家住宅に残る明治天皇が休泊した「御座所」



旧田中家住宅前の石柱

これらすべてにおいて小休所・行在所となったのは、現在の宮町1丁目にあった田中三四郎家で、この家が当館に移築復元された旧田中家住宅なのです。

江戸時代の宮町は、府中宿を構成する3村のうちの一つで、新宿といたしました。田中三四郎家はそこで村役人を勤め、19世紀の半ばには旅籠屋や升酒、太物（反物）などの商いを行っていました。明治時代になると、駅用掛や戸長などを勤めており、土地の持高は新宿で最高でした。明治天皇の小休所や行在所の多くは、このような地域の名望家があてられました。

本展示会では、明治天皇の府中への巡幸・行幸と、明治天皇府中行在所となった田中三四郎家にスポットをあて、巡幸・行幸が明治国家の建設期に積極的に行われた意義と、地域の名望家が果たした役割について考えます。

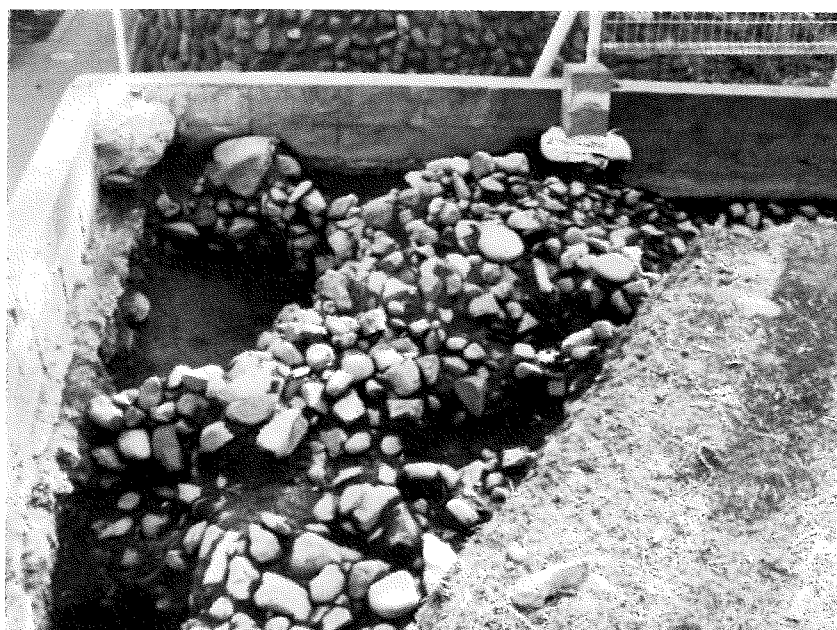
(花木知子)

最近の発掘調査

中世の古道に立つ

板碑の発掘

美好町三丁目 府中市ふるさと文化財課 西野 善勝



中世には、板碑という石造りの供養塔が盛んに立てられました。その姿は、今日なお、路傍や墓地などで見ることができます。市内では、三千人塚の上に立つ康元元年(1256)銘の板碑と、八雲神社の北東隅に立つ元応元年(1319)銘の板碑が代表です。三千人塚のものは多摩地区最古、八雲神社のものは市内最大です。このうち、八雲神社の板碑についてさきごろ発掘調査が行われました。

板碑の立っている場所は、分梅通りが府中産線を抜ける切通しの縁です。分梅通りは中世の幹線道である鎌倉街道上道の推定ルートにあたり、沿道の発掘調査でも道路跡が発見されています。

調査前の板碑は、後に立つ檜の古木の大きな伐り株に下半分をしっかりと挟まれていました。正面を分梅通りに向けた板碑は、やや前傾していました。

発掘の結果、板碑の地下部分には、拳大の礫がつまっています、板碑の基部は地表から約50cmの深さまで埋められていることがわかりました。板碑の周辺からは、常滑焼など中世の焼き物の破片が多く出土していますが、そのほかに、江戸時代の通貨である寛永通宝が11点も出土しています。この板碑が立っている様子が江戸時代後期に刊行された地誌『江戸名所図会』の絵に描かれていますので、銭はこの頃に奉納されたものかも知れません。

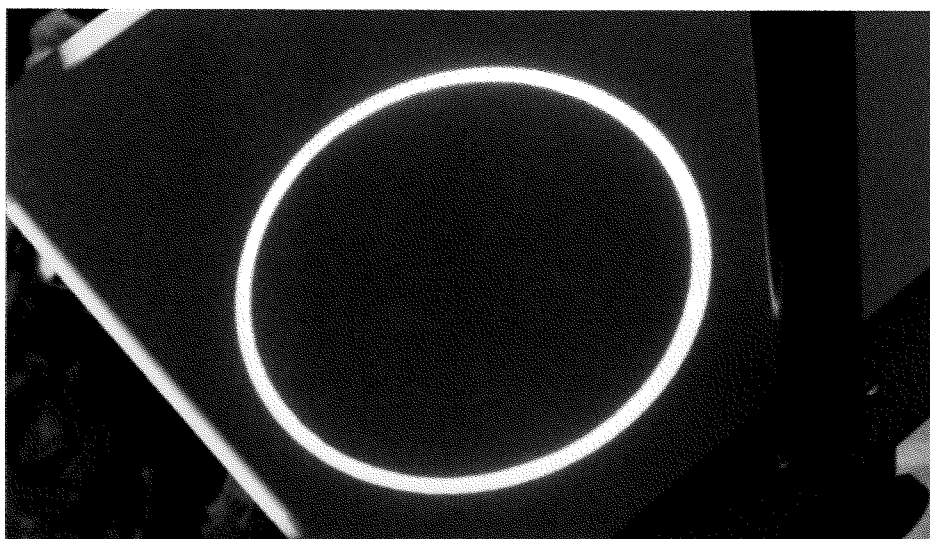
中世に立てられた板碑は、一定期間が経過するとその多くは地中に埋もれてしまいます。しかし、この板碑は作られてから700年近くが経過しているにもかかわらず、現在もその姿を見ることができます。このような景観を維持する原動力となったものは、この地域の人々が持っていた信仰心ではないでしょうか。

調査を終えた板碑は、大切に保存するために府中市郷土の森博物館に保管されています。そして現地には精巧に作られたレプリカを設置しました。配置が少し変わりましたが、これまでと同じように多くの人々に未永く見守られていくことを願っています。



調査前の板碑

板碑は市内で最大のもので、地上高約1.7 m。埋まっていた部分を含めた全長は約2.2 mであった。銘文には大藏近之という人物が亡き父の冥福を祈るために、元応元年(1319)に建立したことが記されている。



金環日食中の太陽 筆者撮影

▼はじめに

2012年5月21日は、九州南部から関東、東北南部までの広いエリアで金環日食が見られました。府中やその近辺では、173年前、江戸時代後期の天保10年8月1日（今の暦に直すと1839年9月8日）以来となりました。

天候は、前線が少しでも南北にずれると変わってくるという梅雨直前特有の微妙な状況でした。しかし、前日の天気予報よりも前線が少し南にずれたお蔭で、晴天とはいかないまでも、多くの地域で金環日食を見ることができました。

▼当館での取組

今回の日食は、当館の休館日にあたるばかりでなく、6時19分～9時2分という早い時間のことでした。また、ハイライトとなる金環日食の時間がわずか5分程度しかないので、数台の望遠鏡で多くの方々に観測していただくことは難しいと判断し、観測会は実施しないこととしました。

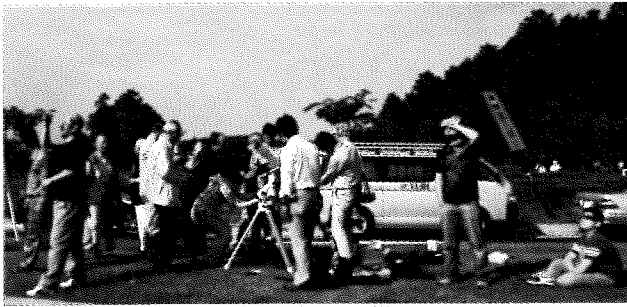
とは言うものの、173年ぶりの金環日食です。マスコミがたびたび報道したように、直視すると日食網膜症や失明の恐れもあります。そこで当館では日食のPRと正しい観測の仕方を、次の

4つの方法で周知しました。

- ①プラネタリウム：マニュアル解説を活かして各投影の時間内に、5分のショート番組で紹介。
- ②観望会：臨時太陽観望会を4月と5月に各1回と、金環日食前日に実施。星空観望会でも紹介。また、関連するプリントを配布。
- ③講座：太陽日食めがねを作る講座を行い、見方なども指導。
- ④小中学校への対応：府中教育研究会理科部に対し、日食グラス作成キットの紹介と安全な観察方法をレクチャー。

▼金環日食の当日

市民を対象とした観測会を実施しないとはいえ、博物館として173年ぶりの日食を記録する必要があります。当初、郷土の森博物館で観測を予定していましたが、朝5時30分には晴れていた空も、雲が南から北に流れて曇り空に変わりつつありました。そのため東側に晴れ間の広がる方向を目指して、圏央道を北上しました。青梅ICを過ぎ、青空が広がり始めたため、狭山PAを目的地に定め、PA内の芝生地に望遠鏡を設置し観測を始めました。残念ながら第1接触（日食の



PAでの観測の様子

始まり)には間に合わなかったのですが、ほとんど雲に隠れることなく最後まで見届けることができました。観測は、赤道儀をセッティングし、投影板に太陽像を映して行いました。望遠鏡は目立つので、自然と近くに人が集まり、その人たちと一緒に観測しました。

▼ベイリー・ビーズ

ベイリー・ビーズは、月のクレーターなどの凹凸の地形によって、日光がとぎれとぎれになり、ビーズのように見えることを言います。1836年にこの現象について初めて正しい説明を与えたイギリスの天文学者、フランシス・ベイリーにちなんで名付けられました。

今回の金環日食では、第2接触（金環日食の開始時）、第3接触（金環日食の終了時）の時に、この現象が観測できました。



ベイビーリース

▼金環日食の時の明るさの変化

日食は、太陽が月に隠れるため、欠け具合によって照度が落ちるはずですが、私が今まで体験した部分日食では、食分が小さかったため、照度の変化にはほとんど気が付きませんでした。対して、皆既日食では、完全に太陽が隠れるため、皆既が近づくにつれて少しずつ暗くなり、風が吹き、気温が下がり、金星などの明るい星が見え始め、明らかに暗くなりました。では、今回の金環日食ではどうだったでしょうか。

もちろん皆既日食の時のようには暗くなりませんでした。青空はあり、影もはっきりできていました。しかし、照度はかなり落ち、ちょっと



金環日食時の照度

不思議な感じがしました。照度計を用意し芝生の上に水平に置いて、日食中随時測定した結果にもあらわれています。食分が

深くなるほど照度が低下し、食の最大のころは、曇り空での照度5,000lxを下回っていました。

▼日食の周期と次回の日食

日食は18年10日8時間ごとに西に120度、すなわち地球の1/3分ずれた場所で起こることが知られています。この周期をサロスと言い、周期ごとに番号が付けられています。今回のサロス番号は128番で、アジアから金環日食が始まりました。同じ番号の次の日食は2030年6月1日に、西に120度ずれた北アフリカのアルジェリアから始まります。そして、北海道を通して太平洋上で終了します。これが、日本で見られる次の金環日食となります。

また、皆既日食は2035年9月2日に中国、北朝鮮、日本（北陸、北関東）で見られます。これはサロス番号が145番で、北アメリカで2017年8月21日に観測できる皆既日食の次の周期にあたります。

今後25年間に日本で見られる日食の一覧を掲げました。府中で半分以上欠けて見える日食は、2030年6月1日の金環日食までありません。天文現象は一期一会、お見逃しのないように！

年月日	種類	場所	サロス
2016年3月9日	部分	日本全国	135
2019年1月6日	部分	日本全国	122
2019年12月26日	部分	日本全国	132
2020年6月21日	部分	日本全国	137
2023年4月20日	部分	九州・四国地方	134
2030年6月1日	金環	北海道	128
2031年5月21日	部分	南西諸島	138
2032年11月3日	部分	日本全国	153
2035年9月2日	皆既	北陸・北関東	145

知る人ぞ知る！ 府中ゆかりの人物



⑤ 浅野長政

今、世の中は〈歴女〉ブームです。歴史上の人物、特に戦国武将を「萌え」の対象とする女性たちを〈歴女〉と言うようです。今回紹介する浅野長政も、戦国の世を生き抜いた武将です。歴女たちの動向に疎い私には、長政が歴女たちにどう評価されているのか知りませんが・・・それはともかく、浅野長政と聞いてピンとくる人は、けっこうな歴史通ですね。むしろ、忠臣蔵でおなじみの浅野内匠頭長矩のひいひい祖父さんと言った方が、「へー」と思っていただけるかも知れません。

それでは、彼の経歴をざっと紹介しましょう。浅野長政は織田信長の弓衆でしたが、豊臣秀吉とは相婿の間柄であったこともあって、信長の命により秀吉に仕え、彼の有力武将として活躍するのです。天正15年(1587)に若狭小浜8万石の国持ち大名となり、文禄2年(1593)には子息幸長とともに甲斐21万5,000石を与えられ、甲府城に入っています。朝鮮出兵にも従い、秀吉が亡くなる前年の慶長3年(1598)には五奉行に名を連ね、奥羽・関東支配の一翼を担っています。秀吉の信任厚い武将でした。一方、徳川家康とも早くから親交を結び、秀吉亡き後には同じく五奉行の石田三成らと敵対し、慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いでは家康軍に属しています。関ヶ原後は幸長が紀伊和歌山37万石に加増転封となり、長政自身は隠居して常陸真壁・筑波両郡さらに近江神埼郡に領地を与えられています。そして同16年(1611)、65歳で生涯を閉じました。名の通った戦国武将であったこと、おわかりいただけたでしょうか。

さて、この長政が府中とかかわりを持つのは53歳、慶長4年10月のこと。前年8月に秀吉が死去すると、三成らの謀略により家康暗殺計画の嫌疑をかけられてしまうのです。長政は甲府蟄居を命じられるのですが、家督を幸長に譲り、府中に隠棲したのでした。もっとも、関ヶ原の

戦いでは家康軍に属し、その後領地を与えられているのは上述の通りですから、府中に隠棲したのは1年足らずのことのようです。

そして隠棲の地と伝える場所が、市内白系台5丁目にあります。かつては、東西・南北とも100m程度の範囲を高さ3m近いの土塁が巡っていたのだそうです。今は都の旧跡に指定され、土塁の一部が残るにすぎませんが、往時の姿は偲ぶことができます。昨年度にはこの一角で発掘調査が行われ、居館を取り囲むような大規模な堀が姿を現しました。この点は本誌前号に紹介されている通りで、今後、隠棲地の考古学的な解明に期待したいところです。

ところで、僅かな期間ではあっても、長政は何故、隠棲の地に府中を選んだのでしょうか。簡単にわかる問題ではありませんが、隠棲に先立つ天正18年(1590)、家康は秀吉から関八州を与えられて江戸に本拠を移します。そして府中の本町に御殿を築き、以後いく度か府中を訪れています。家康の江戸入府によって、府中界隈も新しい時代のうねりのなかに巻き込まれていったのは確かなようです。(深澤靖幸)



浅野長政肖像画(東京大学史料編纂所蔵模写)

平成23年度
寄贈・寄託資料一覧

平成23年度
利用状況

No.	寄贈・寄託者 (敬称略)	資料名	分類	数量	受入
1	棚澤永子	あぎる野市菅生採集土師器 埴	考古	1点	寄贈
2	内田信之	古瓦拓本	考古	81点	寄贈
3	田辺 昇	朝日町採集打製石斧 他	考古	3点	寄贈
4	上村雅一	戦時郵便貯金切手 他	歴史	8点	寄贈
5	平岩紀美子	LIFE (NOVEMBA3,1952)	歴史	1点	寄贈
6	町田駒吉	御霊宮神輿図 他	歴史	4点	寄贈
7	中田徳彦	聯	歴史	2点	寄贈
8	平岡優子	団地ひな	民俗	一括	寄贈
9	土屋栄一	鳶用滑車 他	民俗	41点	寄贈
10	棚澤永子	Arfa BILLY社製蛇腹カマ ラ	民俗	1点	寄贈
11	片山八章	チャンネル式テレビ	民俗	1点	寄贈
12	倉林三郎	愛国行進曲入り扇子	民俗	1点	寄贈
13	福嶋ナツ江	京王線記念切符 他	民俗	一括	寄贈
14	中田徳彦	府中一小百周年記念文鎮 他	民俗	一括	寄贈
15	鈴木紀雄	関戸橋古写真	民俗	1点	寄贈
16	土屋栄一	古写真	民俗	7点	寄贈
17	中田徳彦	結納道具 他	民俗	109 点	寄贈
18	堀江昌子	麦乾燥機	民俗	1点	寄贈
19	小牟田充代	交通安全教育教材	教育	一括	寄贈
20	中田徳彦	雑誌『小学三年生』 他	教育	176 点	寄贈

区分	有料		減免 (障害者・ 4歳未満等)	合計	
	一般	団体			
博物館観覧者 開館日数306日	大人	135,719	5,671	45,424	186,814
	子供	22,355	21,192	47,660	91,207
	小計	158,074	26,863	93,084	278,021
上記のうち プラザリウム観覧者 投影日数289日	大人	28,513	2,768	5,113	36,394
	子供	13,608	11,807	5,213	30,628
	小計	42,121	14,575	10,326	67,022

◆新刊案内◆

◆『府中市郷土の森博物館紀要』25号 400円
学芸員他による研究報告・論文集です。

- ・美濃国本田代官川崎平右衛門定孝の民政 [野田政和]
- ・府中御殿－史料と考察－ [馬場治子]
- ・ムダ堀に関する覚書 [深澤靖幸]
- ・芝間（府中市南町）の暮らしと年中行事
[芝間昔語りの会]
- ・西行説話と武蔵野・鎌倉街道 [小野一之]
- ・府中市域にみる安政五年・文久二年のコレラ騒動
[花木知子]
- ・「サイノカミ」から「どんど焼き」へ
－武蔵府中どんど焼き事情－ [佐藤智敬]

◆『府中市内家分け古文書目録15 400円
本宿小野宮 内藤治右衛門家文書目録』
府中市内に残る古文書の目録です。
本目録よりCD版で刊行しました。

◆『府中市郷土の森博物館ブックレット15 400円
府中メモリアル～記念品から見た地域の歴史～』

府中市域に関連する様々な
記念品から、府中市のあゆ
みを振り返り、モノを通し
た記憶の記録化の足跡を紹
介します。



※新刊は、本館1階ミュージアムショップにて
発売中です。

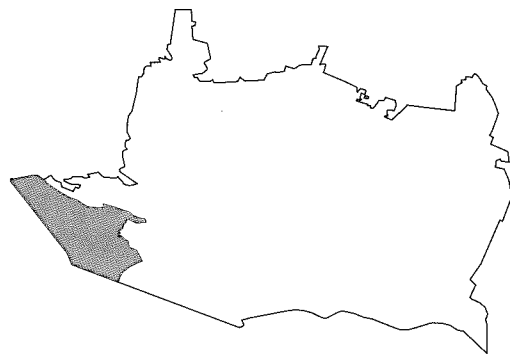
★「あるむせお」は定期購読できます！★

「あるむせお」の送付ご希望の方は1年単位で承
ります。4回分の送料320円（切手でも可）を添えて、
受付カウンターでお申込みください。

町にまつわる雑学講座

～四谷～

府中市は、1954年（昭和29）に、府中町、西府村、多磨村の1町2村が合併して誕生しました。面積29.34平方キロメートルの中には38の町があります。本シリーズでは、その中からいくつかの町に関する雑学を掲載します。



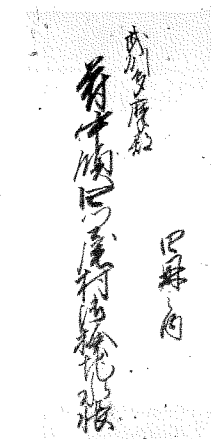
四谷は府中市の西南に位置する町です。北側に日新町をはさんで青柳段丘、南側には多摩川が流れています。「町にまつわる雑学講座」の第1回目は、この町を取り上げ、その地名にまつわるお話をしたいと思います。

四谷のように「谷」が付く地名は、日本中にたくさんあります。そのなかには「渋谷」など、谷合いの地形を反映しているものがあるので、四谷という地名から同様の地形を想像される方も多いのではないのでしょうか。しかし実際の四谷の地形は、青柳段丘と多摩丘陵の間に広がる窪地状の沖積低地で、谷合いの場所とはいえません。このことから、四谷に関しては、地名の由来を地形に求めることはできないようです。

これについて、江戸時代後期の地誌『新編武蔵風土記稿』や『武蔵名勝図会』に興味深い記載があります。当時の四谷は四ツ谷村と記されていたというのです。『新編武蔵風土記稿』には、「正保のものには四屋村とあり」と記されていますから、17世紀の半ばころは谷ではなく屋が用いられていたようです。

府中市内に残っている史料を確認してみると、確かに延宝6年（1678）の検地帳に四ツ屋村と記されています。四ツ谷村という記載が見られる最初の史料は、元禄15年（1702）のもので、これ以降はほとんどのものが四ツ谷村と記されているようです。ただし、延享5年（1748）に四ツ屋と記されているものがありますので、併用されていた時期があるのかもしれませんが、しかし、18世紀半ばころには四ツ谷村に定着していたといつてよいと思います。

それでは、江戸時代の初期に用いられた四ツ屋という村名の由来は何なのでしょう？これについては前掲の『武蔵名勝図会』に、四ツ谷村の名主の家伝として次のような話が記されています。天正年中（1573～92）の四ツ谷村には、開墾者を先祖にもつ民家が四戸あったので「四ツ家村」と書きましたが、いつのころからか「四ツ谷」



延宝6年の検地帳

に改められたということです。ここでは「屋」ではなく「家」と記されていますが、意味は同じことでしょう。このような村の開墾に関わった者たちを「草切り百姓」とか「草分け百姓」などといいますが、四ツ谷村の場合はその家が4つあったので四ツ屋村という名がついたというのです。

この4つの家がどこを指すかには諸説ありますが、江戸時代の四ツ谷村で村役人を勤めていた市川家の先祖である市川内匠忠次という人物に関係があるようです。『新編武蔵風土記稿』によると、市川内匠忠次は甲斐の武田氏に仕えていた父が戦死したことから、北条氏照に仕え、その敗北後、この地に土着したといえます。この人物以外の3家については、紙面の都合上ここでは詳しくお話できませんが、興味のある方は、『府中市史』の上巻と、『府中市史史料集13』に所収されている八代恒治氏の「四谷村の生立ちについて」をご覧ください。

（花木知子）